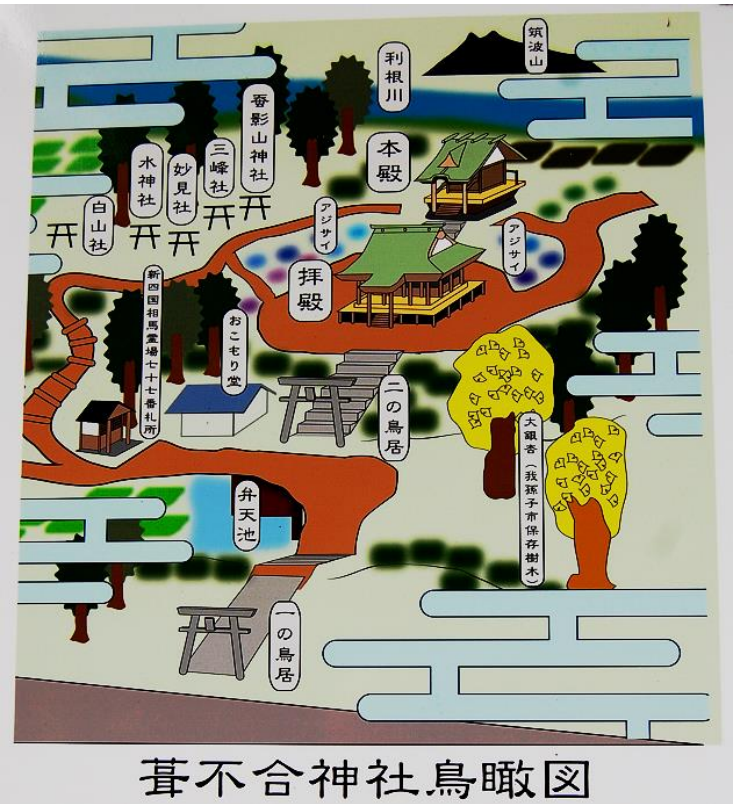
URL：http://88souma.com/

下(↓)　葺不合(ふきあえず)神社境内図



イヌシデ公園の西大作遺跡出土品

９世紀初頭の土師器(はじき)の甕(かめ)で、下半部の内外に墨書が記されています。外面には「意布郷久須波良部千依女(おぶごうくすはらべちよりめ)」、内面には正面右廻りに「久須」「千ヵ」「負郷ヵ」「口」「久須部」「久須」という文字が見られます。

意布＝於賦　同意語「おぶ」

あびこ考古博物館の展示品【まねき看板】

明治 29 年常磐線田端－土浦間の開通により、相馬霊場は日帰りのお遍路さんが大勢訪れるようになりました。取手市小文間戸田井の船宿に残る「講中札」にもあるように、下谷、浅草は勿論、我孫子市湖北の「あびこ考古博物館」にある、「まねき」看板にも写真に示す様に東京の大店がその証を残しています。

日比谷公園「松本楼」は「10 円カレー」で有名になり皆さんもご存知のことと思われます。(写真右下)

あびこ考古博物館には、まねきの他にも古墳の出土品等が展示公開されています。開館日を我孫子市教育委員会文化スポーツ課に確認の上、行かれた方が確実です。湖北郷土資料室 04-7185-1583（歴史文化財担当）

正泉寺宝蔵三図、千葉県指定重要文化財

総州一部邑(正泉寺宝蔵)

女人成仏血盆経出現図

桐姫御寮法性尼生涯の図

孫子市都部(いちぶ)の正泉寺は、鎌倉時代の弘長３年(1263)に執権北条時頼最明寺入道の息女桐姫によって開基されたと伝えられます。桐姫は身体が弱かったために安静の地を求め旅していましたが、都部に落着き尼僧となり「法性尼」と呼ばれて此の地の人々に慕われました。

境内には法性尼の石塔もあり、当初は「法性寺」と言っていましたが、後に君津郡の真如寺から俊峰周鷹(しゅんぽう しゅうよう)を迎えて開山し、曹洞宗大竜山正泉寺と寺号を変えました。

正泉寺が、女人成仏の寺として有名になったのも、江戸時代の後期幕末のようです。寺には、元文元年(1736)の奥書にある「血盆経縁起」や紀州徳川家の久姫桂香院(鳥取藩主池田宗泰夫人)の書写した天明三年の奉納経典の外、絵画三点などが残されていますが、現在佐倉市の国立歴史博物館で管理されています。

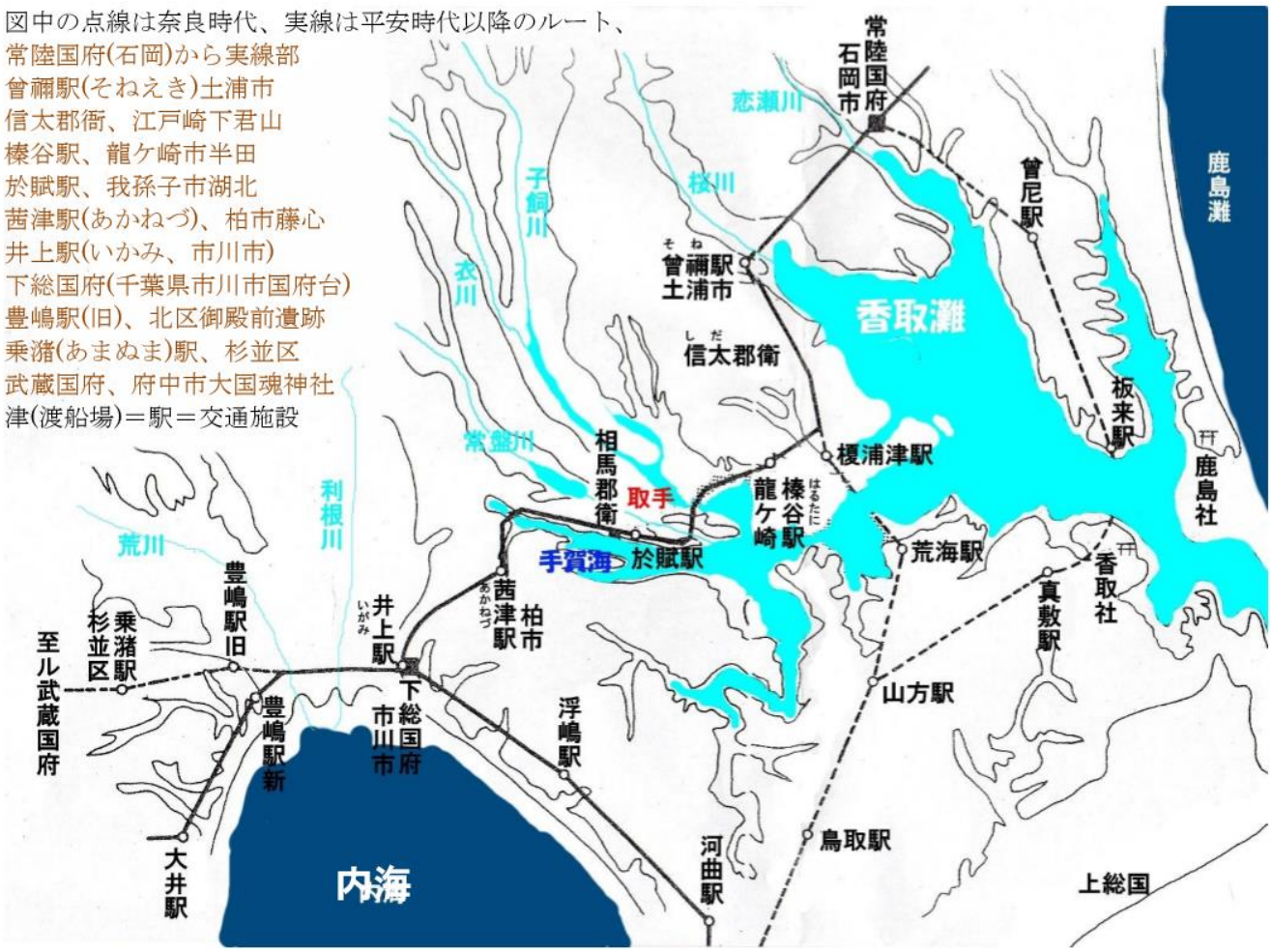
写真中央が「女人成仏血盆経出現図」とする絵で、手賀沼に経典が表れ、小舟でそれを拾う様が描かれています。『我孫子市史』民俗文化財編、1990 年。

もともと原始古代には、女性が血で穢されていると言った思想はありません。いわゆる血の穢思想が形成されたのは陰陽道の影響によると言われています。慶應義塾大学アジア基層文化研究会血盆経信仰の諸相より「女人成仏」とは救済を言うものの言い換れば女性差別。明治政府以降は当然、血盆経の布教は禁止されました。

かなり政府の圧力が強く信仰を抑圧した様子で強硬だった様子です。既に女性差別など存在しない時代に於ける、信仰の自由を制した経緯として、弾圧と捕えている人々も存在しています。

正泉寺の参道は、もとは南の手賀沼畔の船着き場まで通じていたそうですが、次第に市街化が進み街道筋からの参詣が盛んになり、北から松並木が作られて表参道に変えられたそうです。

五畿七道の大道の古代東海道といわれる、奈良時代からの海道筋と駅。



古代の東海道は、五畿七道（ごきしちどう）の一道でした、古代日本の律令制に於ける広域地方行政区画で分けられた国が指定した国道でした。大路の山陽道、中路の東海道と東山道、小路の北陸道、山陰道、南海道、西海道の七道を云います。明治初期に北海道が含まれ八道となります。古代の東海道は奈良～伊勢、鈴鹿～旧東海道～相模～館山～市原～香取～土浦～石岡（常陸国）が初期のルートでしたが、水路を避け安全な陸路へ変わり、相模～武蔵国府～市川の下総国府～柏～湖北～龍ケ崎～江戸崎～土浦～石岡へ、さらに水戸へと時代毎に延伸されていきました。道幅は大路で30m、中路で 12m、小路でも６m程あり広く、16Km 毎に駅が水路と繋がり、馬寄せがあったようで牛馬の交換場所の役割を担っていた様子です。

「於賦駅は何処に」西大作遺跡出土甕、日秀西遺跡を参照願います。　　土浦歴博「古代のみち」より

お遍路ルートと我孫子市湖北の「鎌倉道」　（相馬霊場巡り 9.8km ロングコース）

お遍路ルートその一、JR 成田線新木駅から第 81 番－77 番－25 番－29 番－日秀遺跡－薬師堂－湖北駅迄

◆　オレンジ色の点線は、我孫子市湖北に残る「鎌倉道」です。相馬霊場を巡る会では、将門神社～イヌシデの森の間を、御案内しています。

お遍路ルートその二、湖北駅－73 番－36 番滝前不動堂打止－JR 常磐線天王台駅解散

鎌倉道とは、鎌倉時代に幕府のある鎌倉と各地を結んだ道路網で、鎌倉幕府の御家人が有事の際に「いざ鎌倉」と鎌倉殿の元に馳せ参じた道であり、鎌倉時代の関東近郊の主要道で通信網として用いられていました。

湖北の鎌倉道は、鎌倉から武蔵国経由で下総国府(市川市)を結ぶ「下道」でした、従って我孫子の鎌倉道は、下道の枝道と思われます。但し、我孫子の先の茨城県側の利根町や土浦市辺りにも鎌倉道が残っています。

市川市から千葉市や曽我、市原市経由の鎌倉道もあるのですが、上中下道に分類されていないのでしょうか。

古代東海道とは位置的にも別のルートとなる鎌倉道は関東地域に多く点在します。上野国から児玉～川越～都下武蔵国府～相模国府の鎌倉道は本通りですが、都下府中から鎌倉迄古東海道とは別ルートになっています。

新四国相馬霊場八十八ヶ所巡り

「我孫子の古代の東海道於賦近在を遍路」

JR成田線新木駅前8時40分開始、

午後12時30分頃JR常磐線天王台駅前解散予定。

打始

第七十七番 葺不合神社(ふきあえず じんじゃ)、

移し寺、香川県多度津町桑多山道隆寺(どうりゅうじ)、

御詠歌、ねがいをば 仏道隆に入りはてて

菩提の月を 見まくほしさに、

主祭神、鵜茅葺不合尊(うがやふきあえずのみこと)。

合祭神、市杵島比売命(いちきしまひめのみこと)、

白山比売命(はくさんひめのみこと)

祭神の彦波激武(ひこなぎさたけ)鵜茅葺不合尊は「古事記」「日本書紀」の神話によれば、彦火火出見尊(ひこほほでみのみこと＝山幸彦)と海神の娘の豊玉姫(とよたまひめ)との間に生まれ、神武天皇の父とされる天神です。豊玉姫＝卑弥呼(中国名)です。

彦火火出見尊が姫の為に鵜戸岬に鵜の羽で屋根を葺いた産屋を造ろうとしたところ、葺き終えぬうちにうまれたため命名されたと伝えられています。

神社の創建は古く、もとは宮後方の明神の森に鎮座し、沖田(おきだ)神社と呼ばれていました。

もともと、この地は沖田村と呼ばれていましたが、文化九年(1812)に沖田の名を廃し、新木と名付けられたということです。

現在地は、竹内無格社(むかくしゃ)厳島神社の境内地で、市杵島比売命がまつられ、その創建は平安時代末の文治二年(1186)に遡るとされています。

ここが葺不合神社になったのは明治39年(1906)の神社合祀令によるもので、三峰神社とともに合祀され祭神に鵜茅葺不合尊に市杵島比売命と白山比売命が加えられました。

現在の拝殿は明和年間(1764～1772)に弁天堂として造立されたもので、沖田村の弁天様と呼ばれ、布施弁天と並ぶ弁天信仰で発展しました。

方三間(正面、側面とも柱間三間)の入母屋造り、向拝付で、建物の中心部が広く、正面中央の壁に天女の舞姿の色彩画があり、各間の小壁に草花鳥獣の彫刻が彩色され、向拝柱には麻の葉模様の彫刻が施され、弁天堂にふさわしい華やかさを持っていて、現存する木造建築物では市内有数のものでした。

平成15年の改修工事の際、屋根の裏から棟札が見つかり、明和二年(1765)の墨書によって拝殿の建造年が確定しました。葺不合神社の祭祀は、現在、我孫子市新木の中峠天照神社の宮司が兼務しています。

拝殿の後ろにある本殿は明治32年2月の建立で、大工は新木村の田口末吉、木挽は根本米吉、彫刻師は二代目後藤藤太郎等によって造られました。

方一間、流造の正面に千鳥波風(ちどりはふ)があり向拝正面を唐波風とする銅版葺きで、四囲の扉や板壁、向拝まわりが神話や瑞祥(ずいしょう＝めでたい)の図の彫刻で飾られている。御開帳は十月一日。

この本殿は合祀の際に村人総勢により、字宮前の地から数百メートルも曳かれて来たといいます。

現在の氏子は80人からなりますが明治13年ごろの記録によると、443人もの氏子がおり村の信仰の中心であったことが分かります。

本殿は昭和47年の工事で茅葺き屋根を鉄板で覆ってしまいましたが、平成15年銅板葺きとし、床下は玉石の間をコンクリートで固め、回廊の下は布基礎(ぬのきそ、建築用語)に改装されました。

胴廻りの彫刻は、竜や獅子の眼は総て抜いてあるが玉眼を入れる予定であったのでしょう(途中で予算不足?)、全体的に丁寧な仕事です。

彫刻の絵は、前面が三韓征伐(高句麗を含まない朝鮮半島南部の征服)と、左側面が神武東征(大和を征服して橿原宮で即位するまでを記した説話)、後側が天之岩戸、右側面が素戔嗚尊の八岐大蛇退治。

本殿の後に紀元二五五二年(昭和7年)建立の鵜茅葺不合尊の碑がある台座は、明治25年(1892)村民72名の寄金によって先代の碑が建てられた時のもので、祠掌(ししょう＝社の関係者)に依田信彦の名があります。旗本依田氏は幕末まで新木村の領主で維新後は長福寺の境内に住んでいたと云われています。

新木駅の北西千㍍、東から西に突き出した字五郎地に新木城跡があったといわれています。

現在、遺構は確認出来ませんが「竹之内」という館跡を示唆する地名が残っています。

「五郎地」「竹之内」の地籍の一部は葺不合神社の境内になっています。神社後方の森が五郎地です。

「あびこ風土記」によれば、新木城には柴崎城に移るまえの荒木三河守胤重が築城し、後に、家臣の田口内蔵之助が配されたといわれています。

田口内蔵之助は、取手の雁金山の合戦に参戦し「東国戦国記」を残しています。

民話である「取手の名の始まり」の母体となるの

が「雁金山の合戦」です。

葺不合神社の一の鳥居は昭和8年の再建、二の鳥居は明治15年のもので五郎地から移されたものです。神域は広く境内には籠堂があり仏像数体が保存されていました、現在は集会所。

神社左手の林の中には村内各地から移された、蚕影(こかげ)神社、三峯神社、童形妙見像、龍宝水神、神明社が参道脇に配置されている他に、「五ノ神」湯殿大権現、八幡宮、稲荷大明神、天満天神宮、青麻(あおそ)大権現などの石仏、石碑が多く祀られていて、地元では「お日(にち)さま」と呼ばれていました。

安永五年石柱建立時のご本尊は聖観世音菩薩です、また、弘法大師像は文化四年(1807)の造立。

大師堂は昭和4年に再建されています。

なお鵜茅葺不合尊を祀った総社として、宮崎県の鵜戸神宮があり、卑弥呼の伝説が伝わる社です。

平成天皇が新婚旅行先として有名になった所です。

葺不合神社氏子中「葺不合神社」縁起より、

個人の大師堂　壱、捨身ヶ嶽禅定の写し

本国四国の霊場第七十三番奥の院　捨身ヶ嶽禅定(しゃしんがたけ　ぜんじょう)の写し。

青麻(あおそ、麻)大権現を信仰していた、田口氏個人による四国巡り参拝記念に立てられたお堂のようです。

この青麻権現には「四国霊場七十三番奥の院捨身ヶ嶽禅定の写し」とあり大師堂が祀られています、棟札によると「中気除け青麻大権現」として信仰され、相馬霊場の一角に祀ったのでしょう。

青麻神社の総本社は宮城県仙台市の「県民の森」の先にあり、「三度詣でれば生涯、中気(ちゅうき)の難よりのがれる」と言われていました。

「中気」とは脳卒中、脳梗塞などの急に訪れる脳の病いを総称して言っていました。

本国の四国霊場には、四十八の奥の院がありますが、特に七十三番奥の院は、弘法大師にとって重要な意味をもつ霊場でもあります。

弘法大師が七歳のときに、「衆生を救いたい、その力がなければこの身は諸仏に捧げます」と断崖絶壁の頂きより身を投じられたが天より天女が舞い降り弘法大師を抱きとめ「一生成仏」とお示しになられた所であるのです。弘法大師七歳の時の名は「真魚(まお)」でした、弘法大師である空海の幼少の頃の記述は少なく、この伝記は自書の三教指帰(さんごうしいき)や、上表文や手紙を集めた弟子真済の遍照発揮性霊集(しょうりょうしゅう)より推測されています。幼少の頃から仏心に目覚めた真魚を稚児(ちご)大師として崇める由縁でもあります。

「天女に抱き留められた」説と「松の枝にひっかかる」の2つの説があります。真言信仰では捨身ヶ岳と云われる「我拝師山(がはいしざん)」は、倭斬濃山(わしのやま)と呼ばれていました。

個人の大師堂　弐

真栄寺墓地に聖徳大師堂があり傍に「土佐国第一番」という霊場札所があり、朽ちかけた御堂の中に弘法大師像が祀られています。

土佐国には24番から39番まではあるが、土佐国第一番とは、さていったい何でしょう。

この先の日秀には、相馬霊場の25番と29番が在り共に土佐国で25番が津照寺、29番は土佐国分寺の移しにあたります。しかし相馬霊場とは別であり、云われが分りません、土佐出身の方の霊場でしょうか。

土佐城主の長宗我部元親(ちょうそかべ　もとちか、天文8年(1539)～慶長4年5月19日)は、坂本竜馬に次ぐ土佐高知の人気者イケメン城主で話題となった。

司馬遼太郎『夏草の賦』(1968年、文藝春秋)。

オキザリスの旗　長宗我部元親外伝(2011　年集英社)、こちらは漫画で紹介されています。

第廿五番、地蔵院(廃寺)、我孫子市古戸(ふると)

ご本尊、地蔵菩薩、

移し寺、高知県宝珠山津照寺(しんしょうじ)。

御詠歌、法の船　入るか出るかこの津寺

迷うわが身を　のせてたまえや

ご詠歌の訳、「津寺」とは、ある寺の名を詠み込んだもの。総ての船の出入りする海岸を津と称する。

「生とし生けるもの一切の衆生を救うという「法の船」は、此の津に入るか出るか分からないですが、御誓願込めて「**弘誓**(ぐぜい)**の船**」で渡海を待ち望んでおります。どうか私共を乗せて下さいと頼む事。

地蔵院は、現在上新木公民館となっています。

真言宗豊山派もと龍泉寺の末寺です。開山開基は不詳ですが、貞享三年(1636)銘の舟形大日如来像を浮彫りにした墓碑があり江戸時代始めには僧が止住していた事が伝わっています。

明和七年(1770)に旧本堂が造られ、明治六年に廃

寺となりましたが明治30～35年頃に、東京都下(23区外)の人々が盛んに参詣し千体地蔵菩薩像や護摩道具が寄進されました。

地蔵堂は、昭和44年老朽化により解体され青年館を新築、一時その一間に安置されたのですが、昭和57年に現在の堂が建てられ、厨子入り本尊の後に千体地蔵1227体が祀られました。他に不動明王立像があります。大師堂は文化四年(1804)の建立です。

第廿九番、日秀の慈愍山(ひびりのじびんざん)

日秀観音寺、曹洞宗、元は正泉寺の末寺でした。

御本尊、聖観世音菩薩、
移し寺、高知県摩尼山(まにざん)国分寺、
御詠歌、國を分け 宝を積みて建つ寺の
末の世までの 利益のこせり

日秀観音、古くは将門神社の境内に仏堂がありました、将門の守り本尊である行基菩薩作の観音像を安置し、守谷の西林寺から徳道和尚を請じて開祖とし大悲山和泉寺と称しましたが、時を経て現在地に移され、改めて観音寺として再建されました。

寛文二年(1662)の開山は正泉寺九世名翁全誉大和尚(めいおうぜんよ)であり、開基は長安定久禅定門(ちょうあんじょうきゅうぜんじょうもん)です。

「下総国相馬郡日出村観世音菩薩縁起」では「中世、日出(日秀)彈正友治が、この地の守護となり深く観世音菩薩を信仰し観音寺境内に一宇を建立し名翁和尚を導師として安座供養し奉る。」とあります。

札所は安永四年に創設されました。

観音堂には将門の後裔と名乗った相馬氏の九曜紋が飾られております、元は萱葺きであったのですが、昭和48年にトタン板で萱屋根は覆われました。

向拝をはじめ各所に彫刻が見られますが、明治の彫刻家である後藤藤太郎兼松(布施弁天の楼門の龍を彫るとも云われる)の後藤家初代の作と言われています。

本堂のご本尊は釈迦牟尼仏を祀っています。文化九年(1807)の道元禅師像(曹洞宗)があります。

大師堂は明治11年の再建です。大師像は石造二体の像があり、文化四年(1807)の刻銘があります。

成田街道に面した東端には、成田へ行く道を聞いた旅人に成田とは反対方向を示している「首曲がり地蔵」があります。

平将門調伏の祈祷を行った成田山への反発から作られたといえます、日秀では「成田山に参詣しない」「キュウリは輪切りにすると将門の九曜紋になるので縦に切って食べる」と言う風習が残っていました。

2012年春、薬師堂が新たになりました。

【 四国霊場の廿九番について 】

四国の第29番は、土佐国分寺で「ゴメン」の発祥地です。JR土讃線御免駅が土佐市の隣の、南国市にあります。

土佐の戦国武将、長宗我部元親(ちょうそかべ もとちか)の家臣数百人が百姓をしていた、一領具足(いちりょうぐそく、※)という制度に暮らす土地で、二期作(年間で同じ作物を2度収穫する)が行われた所です。

元親は町の繁栄の為に諸税を免除したため「御免」の名がうまれた、と言われています。

永禄元年(1558)焼失した当寺を元親は再建し、その後山内忠義が山門を建立、優雅でしっとりとした建物のまま今に至っています。また近くには、紀貫之の屋敷跡があります。

紀貫之(きのつらゆき、貞観八年(866)貞観14年(872)頃～天慶8年5月18日(945/6/30、土佐日記の作者)。平安時代前期の歌人、『古今和歌集』の選者のひとり。三十六歌仙のひとりでもある。紀友則は従兄弟にあたる。

※ 屯田兵のこと。平素は農民、動員の法螺貝合図で農具を武具に替えて出陣した。具足は一領、馬一頭で戦場を走り回るため「一領具足」と言われた。

^^^ 平将門調伏の祈祷。

東京の神田明神を崇敬する者は成田山新勝寺を参拝してはいけない、というタブーが伝えられています。「江戸っ子は成田へ行かない」「きゅうりの輪切りは喰わない」が江戸子気質の象徴でした。

これは朝廷に対して叛乱を起した平将門を討伐するため、僧、寛朝(かんちょう)を神護寺護摩堂の空海作といわれる不動明王像と供に、現在の成田山新勝寺へ使わせ、乱の鎮圧のため動護摩の儀式を行わせたから、であるという。即ち、新勝寺参拝は将門を苦しめる事となるためなのでした。

なお、同じく将門を祭神とする神楽坂の築土神社にも同様の言い伝えがあり、成田山へ参詣するならば、道中に必ず災いが起こるとされました。

将門に対する信仰心は、祟りや厄災を鎮めることと密接に関わっていたようです。

個人の大師堂　参

日秀観音前の、成田街道(国道 356 号)の向かい側には第55番大師堂があり、個人所有(古戸の田口氏)のもので、新木台にある「土佐の一番大師堂」や新木台の第73番青麻権現など全て明治の頃に個人的に造られたもので、講の活発な活動が日秀に存在していました。

現在迄残ったこれらの大師堂は、相馬霊場との関連性を含み、貴重な庶民による遺産であり、後世に残したいものです。

日秀の將門伝説

將門神社は平將門の遺臣達により將門の霊を祀ったといわれる。かつては平親王の七騎大明神(將門の七人の影武者を祀る明神社)と呼ばれていました。(平親王とは、平は平將門、親王は天皇に同位する東国の天皇をいう)

日秀(ひびり)では天慶三年(940)に戦没した將門の霊が遺臣達と共に沼南町岩井(千葉県柏市沼南町の岩井で茨城県板東市の岩井とは違います)の明神下から日秀まで手賀沼を騎馬で渡り、沼のほとりの丘で日の出を拝したと言い伝えられています。その伝承の地に一宇を建てて霊を祀り鎮守したのが当社の起こりといわれています。

將門の三女如蔵尼(にょぞうに、或いは次女の如春尼であったともいう)は父の三十三回忌にあたる天禄三年(972)に將門ゆかりの地岩井に將門の霊を祀りました、それが沼南町岩井の將門大明神であり、その後各地で祀られる様になったそうです。

將門名の神社は、およそ十社が現存していますが、**日秀の將門神社**の社殿はかつて萱葺き屋根の寄棟造りであったものが老朽化してしまい、昭和30年に石造になり鳥居も建てかえられました。

天保六年(1835)の「將門大明神」の幟(のぼり)が伝わっているそうですが確認はしていません。

日秀は將門が幼少の時過ごしたという伝説ですが、**將門井戸**は、將門が承平二年(932)に掘削して軍用に供した井戸で「古式の井戸」又は「石井戸(いわいど)」と呼ばれ、中相馬七つ井戸のひとつといわれています。

【地名の日秀について】

日秀(ひびり、京都嵯峨野の瑞龍寺を建立した日秀”にっしゅう”ではない)とは、日の出～日出(ひいで)～日ビリと訛ったという説と、將門の遺臣日出弾正(ひのでだんじょう)正佐友治が、この地に居住したのが起りと言う説があります。

日出弾正は平將門とは対照的な、なよなよした人格であったのでしょうか、駄目弾正と卑下されたあげくには「日出」の読みを、ビリ(下)から数えて「日ビリ」と呼んだそうです、だが字だけは優秀の秀(なよなよが、しっかりとした文字形となる字源、意味は最上など、として日秀(ひびり)としたとか、漢字の字源を巧みに利用した逸話を聞いています。

また平將門の敵方であった俵藤太秀郷の秀をビリにこじつけた説もあります。

【日秀西遺跡】

2012 年春に閉校した、県立湖北高校跡地を含む日秀観音寺一帯に広がる「日秀西遺跡」があり、その一部の発掘調査が、昭和53年(1978)に行われました。

主な遺構としては、縄文時代住居跡が2軒、弥生時代住居跡が2軒、古墳時代住居跡が 188 軒、奈良時代以降の建物跡54棟が検出され、古墳時代以降に生活の跡が集中することがわかりました。

古代の行政区分では全国を六十余国に分け、さらに各国をいくつかの郡に分けていました。郡は税金の徴収や戸籍の編纂など、律令政治の基礎を担っていました。

下総国相馬郡の郡家でもっとも重要な正倉には、米などの穀物を保管し管理していたのでしょう。

江戸時代の国学者塙保己一が残した『群書類従』家系部に「新木村住人に相馬蔵人佐あり」の記載があり、平や相馬家の多くの蔵人(くろうど、国家食料管理役人)が住んでいたと記録が残されています。

相馬蔵人佐＝相馬蔵人佐則胤、くらんどのすけのりたね？　惣領小次郎殿以御家伝書写之。

佐則胤なので人名となる。「蔵人」に引っ掛けているので、訳は「相馬蔵人佐則胤という蔵人が居た」。

於賦と意布、意部は同意語で「おぶ」という。

延喜式所載の下総国の駅家は、東海道の場合市川の井上(いがみ)から茜津(あかねづ)、於賦の3駅です。

古代東海道の研究は、時間が掛かっています。

だが此の研究は、その痕跡を探すだけでも簡単な事ではないので仕方がないことだと思います。

それでも最近の研究によれば、承平年間(931～938)に編纂された「和名類聚抄」では、相馬郡の意部郷という「おぶ」で同じ読みであり、この郷内に

あったものと考えられています。

また、正倉院文書の中には「下総国倉麻郡意布郷養老五年(721)戸籍」というものがあり、養老5年は延喜式と大きく遡るが、「倉麻郡」は相馬郡意布郷で同じものとされています。

この戸籍に記載された人々の姓は殆どが「藤原部(ふじわらべ)ですが、その後に台頭してきた藤原氏に遠慮して、天宝宝字5年(757)の勅により「久須波良部(くすはらべ)」に改姓させられてしまったということがわかっています。

我孫子市新木地区の幾つかの遺跡から「久須波良部」と記された墨書土器が発見され「意布郷」の文字も記されたものがあり、これらの土器の年代が9世紀前葉～中葉と判定されたことから、我孫子市新木地区を中心に「於賦、意布、意部郷があったことがほぼ確実になりました。

千葉県我孫子市にある鎌倉道

鎌倉道は、各地より鎌倉に至る古道の総称です。

高崎からの上道は有名ですが、我孫子の鎌倉道は市川市迄の下道の枝道になります。

鎌倉道は一般に山腹を通り、幅は一間～二間(2～3m)で馬が2頭並んで通れる位の狭さで途中野営に便利なように井戸やお堂に近いところを選んでいるようです。お堂は西から湖北台八丁目の八幡神社、中峠の天照神社、湖北台一丁目にあった熊野神社、中里の諏訪神社、日秀の将門神社、新木の香取神社、大鷲神社（現在は葺不合神社に合祀）などの神社がこの沿道にあります。

また井戸は八幡神社下の元日(がんち)の井戸、熊野神社下の島の下の井戸、將門の井戸、香取の井戸(現存)などがあります。　湖北座会 2000年4月1日

【地名の都部(いちぶ)について】

都は一と共通する意味がありました、一番の部落が都部落に変化したという説です。角川地名辞典

正泉寺の伝説である、地蔵菩薩のお告げで、住職が手賀沼へ行ってみると、水面の一部(都部)から経典が湧き出したところの由来もあります。

第七十三番、大竜山正泉寺(しょうせんじ)、我孫子市北台、ご本尊、延命地蔵尊。

移し寺、香川県我拝師山出釈迦寺(しゅっしゃかじ)

御詠歌、迷いねる　六道衆生救わんと

尊き山に　いづる釈迦寺

六道とは、地獄、餓鬼、畜生、修羅、人間、天上

大師堂は安永四年(1764)観覚光音禅師が願主として禅師と共に四国の出釈迦寺から土を運び相馬霊場73番を開基した石柱が参道に残されています。

弘長三年(1263)北条時頼の息女法性尼(ほっしょうに)＝桐姫が留庵したとの草創伝説があります。

源時頼を開祖としています。後に真如寺より俊峰周鷹(しゅんぽう しゅうよう)を迎えて開山し曹洞宗寺院となりました。高く険しい峰＝俊峰、の意もある。

俊峰は永正三年(1506)入寂し以来四十一世を数えます。また手賀太守の原兵右衛門尉胤次(はらひょうえもんのじょうたねつぐ)を開基として、位牌と石造の宝篋印塔(ほうきょういんとう)の供養塔があります。

七世の竹厳宗嫩(ちくげんそうどん)は白泉寺を開山、九世の名翁全誉は日秀観音寺の開山で、ことに十一世の徳翁良高は声望高く修行僧の参禅する者が多く寺は栄えました。

しかし明和三年(1754)火災に遭い伽藍を焼失、血盆経なども失われました。

十年後の安永三年(1764)に旧書院を移して本堂としました。本尊の地蔵尊は、文化文政年代に光格天皇の祈願仏となり、仁孝天皇の梵鐘御寄進で鐘楼門を建立されました、明治以降には鐘楼門他の修理が行われています。

血盆経(けっぽんきょう)と女人成仏(にょにんじょうぶつ)

弘長三年(1263)北条時頼の娘桐姫法性尼の創建と伝えられています、女人成仏の霊場として著名です。女人成仏血盆経出現図等の絵画3点と血盆経縁起・紺紙金泥血盆経をはじめとして版木類一式を含む資料は、近世民間信仰を明らかにするものです。1998年3月千葉県指定文化財(有形民俗文化財)。

『血盆経談義私』には、正泉寺の前身、法性寺(宗派不明)の長老の母が血盆池に堕ち、母を救うために長老が血盆経を書写したという説話が載っており、正泉寺が前身寺院の縁起を換骨奪胎(焼き直し)して、法性尼を主人公とする新たな縁起を作ったことがわかっています。

飯白和子氏(「待道大権現とマツドッ講―市内における女人講の変遷過程を通して」我孫子市教育委員会資料)によると。

正泉寺が血盆経信仰を喧伝しはじめたのは、明和年間に荒廃した寺院再興のためであった。

この論考では、千葉県に見られる安産講、待道講が正泉寺の隠居寺、白泉寺によって広められた待道大権現の信仰によるものであることが明らかにされています。

正泉寺では、血盆経出現縁起や血盆経本文を多数版行しており、血盆経霊場として広く知られるようになっていった。なお、当寺では地蔵を血の池地獄の救済者とし、三幅の縁起絵を所蔵しています。

慶應義塾大学文学部基層文化研究Gの資料より。

【法性尼伝説】

桐姫は十六歳の頃、法性尼となってここに法性寺を創建したが、二年後には病に倒れ世を去りました。

しかし、法性尼永眠後 153 年を経た応永 24 年(1417)、法性寺の檀家孫右衛門の娘**おとり**は霊にとりつかれ、娘は貴婦人の姿となって、腰から下を紅のように染め苦しみなから寺の和尚に「私は桐姫 法性尼です、血盆地獄に墜ち苦悩が絶えません。どうか法性寺にある延命地蔵菩薩にお祈りをして欲しい」と言って和尚に頼みました。

和尚は直ちにお祈りをあげるとその夜、「直ぐに手賀沼へ行け」とお告げがあり和尚は、早朝、手賀沼へ行きました、すると沼底から白蓮が一本現れその中に経文が乗っていました。

和尚は経文を持ち帰り、娘の枕元で読むと「私は法性尼と共に成仏いたします」と言って息が絶えましたが、程なくして蘇生し現世のおとりに戻ったといいます。

ここに「血盆経」が出現し女人成仏が可能となり、この頃大騒ぎとなり時の将軍であった、足利義満は「女人成仏血盆経出現道場」の額を贈ったといいます、山門にそのレプリカが飾られています。

又手賀沼の清い泉から出現したことから寺名を正泉寺と改められたそうです。この後「延命地蔵尊」と「血盆経」は多くの婦人信仰者の祈願寺となりましたが、現在布教は行われておりません。

参道入口の脇には、桐姫こと法性尼の五輪塔が佇んでいます。「五輪卒塔婆」ともいいます。

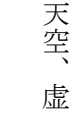
五輪塔と多くの卒塔婆は、**五大**の種子(しゅじ)梵字によって最上から、

団形(宝珠)の キャ=空(くう)輪、天空、虚空のことであり、仏教思想の空(から)のことでもある。

半月形(半球)の カ=風(ふう)輪、成長、拡大、自由を表す。

三角形の ラ=火(か)輪、力強さ、情熱、何かをするための動機づけ、欲求などを表す。

円形(球形)の バ=水(すい)輪、流体、無定形の物、流動的な性質、変化に対して適応する性質。

方形の  ア=地(ち)輪、大地である地球を意味し、固い物、動きや変化に対して抵抗する性質。

と刻まれています。よく見ると人が座禅をしている姿をしています。

これは密教が説く宇宙の生成要素である五大(五輪)思想を表し大日如来のシンボルとして尊崇されています。

皆様もおなじみの、お墓に供える**板塔婆**の切込みはこれを簡略した形になっています。

五輪塔の形はインドが発祥といわれ、本来舎利(しゃり=釈迦の粉骨など)を入れる容器として使われていたといわれるが、日本では平安時代末期から供養塔、供養墓として多く使われるようになりました。

中国の五行思想（木・火・土・金・水）と数が同じで、一部共通する物もあることから混同されやすいが、両者は全く別個に成立したものです。

正泉寺と血盆経

正泉寺は、近在の手賀沼から「血盆経(けつぼんきょう)」と言う「女人成仏」を説いた経典が、手賀沼の蓮の葉から出現したと言う伝説があり、全国的に女性の信者を集めていたことで知られています。

古代インドでは女性の地位は極めて低く、浄土にも女性はいないと考えられていました。その影響は仏教にも及び、女性はそのままでは成仏し難い存在とみなされていました。日本でも鎌倉時代になると、親鸞や日蓮などのように女人成仏を認める考え方も見られるようになったものの、一般には「女鎖」とか「女賊」と呼ばれ、女性は血で穢れた罪深い存在であり、成仏を妨げる「業障(ごうしょう、成仏することを妨げること)」となるものとみなされていました。そのため、高野山や金峯山のように、「女人禁制」の結界石を立てて、聖域や霊場への女性の立ち入りを禁じていた場合も普通に見られていました。

今日の男女平等の思想に比すると何とも不合理な考え方でしたが、この血盆経では、血によって地神や水神を穢したために血の池地獄に落ちる宿命を持つが、この血盆経を書写し祈ることによって救済されると謳っていました。この経典は中国で10世紀以降の明や清時代に、道教や仏教その他の思想をもとに民間で広まった「偽経」と言われ、わずか420字の小経典でした。日本に伝えられたのは室町時代以降で、日本国内で一般に普及したのは江戸時代になってからのようです。この経典は、朝鮮ではほとんど受容されなかったと言われます。

我孫子市谷津ミュージアム（ビオトープ）

我孫子市では、2002年から手賀沼沿いで最も谷津の地形と自然環境が残されている岡発戸と都部地区の谷津36.7ヘクタールをまるごと保全し、昭和30年代の農村環境の復活をめざす「谷津ミュージアム」事業を進めています。

「谷津」とは、台地に谷が入り込む独特の地形で、その細長い低湿地部は昔から水田として利用され、谷津田と呼ばれてきました。

谷津田は、米を生産する場であるだけでなく、様々な生き物を育む場でもありました。

こうした谷津の自然環境を再生し、伝統的な農業やくらしの風景を復活させ、それをまるごと「野外博物館」にしていくものです。

そこでは、市民と自然とのふれあいや、農業者と消費者の交流が図られ、「自然と人の共存」のシンボルになります。（カラーページの図参照）

第三十六番、滝前不動、

我孫子市岡発戸(おかぽっと)

移し寺、高知県独鈷山青龍寺。

ご本尊、不動尊像、寛平時代(889～897)平高望王が空海作の不動尊像を祀ったといわれています。

御詠歌、わずかなる 泉にすめる 青竜は
仏法守護の ちかいとぞ聞く

「滝不動」又は「滝前不動」と呼ばれています、旧滝前山宝積寺なのか明確ではないが、白泉寺の末寺でした、現在は正泉寺が管理しています。

白泉寺の竹厳宗嫩和尚が慶長の元和年代(1596－1623)に此処に堂宇を営んだと言われています、手賀沼を見下す景勝の地にあり、寛平年間(889～897)高望王が空海作の不動尊像を祀ったとの伝承が語られています。当時の堂は寛和二年(986)に損壊して不動尊像は中峠(中里)の一里塚の東に移され、さらに中峠の照妙院を経て現在は不動尊の胎内に納められていると云う伝説です。

境内には不動明王の石像があり、現存の不動堂は文化13年(1816)の建立です。

明治の寺院明細帳には記載が無く当時は廃寺になっていたものと思われますが、明治20年代に大修理が行なわれました、屋根は昭和51年に葺き替えられました、堂は三間四面入母屋造り萱葺き屋根の建物ですが、仏像仏具はありません。

又、第76番龍泉寺本尊の波切不動明王と滝不動明王は第60番照妙寺で両方の伝説が交錯します。

大師堂も不動堂と同時に改築されています、石造大師像は文化四年(1807)の銘が残されています。

滝の横に不動信仰を表す「剣に巻きついた竜がその剣を呑む様」が彫られており、安政七申正月吉日(1855)銘の倶利伽羅(くりから)竜王像と不動明王の真言「なうまくさんまんだ ばざら だん せんだ まかろしゃだ そわたや うんたらた かんまん」と記された石碑があります。

たきまえ不動には湧き水が豊富でした、その量は井戸がかれても水が流れていたといわれていたのですが、今は、昭和40年代のゴルフ場と山林の伐採により涸れてしまったそうです。

たきまえ不動は戦前までは観光スポットであり、小説家である志賀直哉 ゆかりの藤棚があり春には花を咲かせています。又、志賀直哉の作品「矢島柳堂(鷂)」の舞台になっています、この小説は志賀直哉が我孫子に居住していた頃の作品ですが、現在入手が難しい、我孫子市アビスパにあります。

松尾芭蕉の句碑

松尾芭蕉は亡くなる寸前に、付き添いの支考(しこう)へ嵯峨で吟じた「大井川浪に塵なし夏の月」の句を改案したい旨を告げ改句しました。

滝前不動境内のこの句碑は、取手の商人丁字屋伊八ら十三人が慶応三年(1867)に建立したものです。

清滝や 波に散り込む 青松葉 ― ばせを

この句こそ改案された松尾芭蕉の生涯に於ける最終句ですが、滝前不動との因果関係はありません。

松尾芭蕉は「鹿島紀行」で相馬を訪れています。そのルートは江戸深川の草庵から市川、鎌ヶ谷と鮮魚(なま)街道を北上し布佐から鹿島へは利根川の船

旅でした、従って我孫子の滝前不動に立寄ったかは不明です。

鹿島紀行の芭蕉の日記に次ぎの手記があります。

日既に暮かゝるほどに、利根川のほとり、ふさといふ所につく。此川にて、鮭の網代といふものをたくみて、武江の市にひさぐもの有。よひのほど、其漁家に入てやすらふ。よるのやど、なまぐさし。

月くまなくはれけるまゝに、夜舟さしくだして、かしまにいたる。

貞享四年(1687)8月芭蕉44歳の鹿島詣でより。

「武江の市」の武江とは江戸の意、市は両国の魚市場を指します。「鮭の網代」とは、布佐の都(みやこ)の利根川は川幅が狭まる為に網によって遡上する鮭を一網打尽にすることが出来、網代場(あじろば)と言われました。

利根川の鮭は鮮魚(なま)街道によって江戸に運ばれ、鮮魚は翌日には多くの江戸の人々の食卓を飾りました。「なまぐさし～夜舟さしくだして」は、魚の生臭さに耐えられずに逃げ出すという記載でした。

松尾芭蕉はこの後に奥の細道を旅しました、正保元年(1644)～元禄7年10月12日(1694 年11月28日)、大阪で亡。芭蕉の葬儀には間に合わなかったようですが、俳人小林一茶も大阪に訪れたそうです。

打止

移し寺である四国霊場36番独鈷(とっこ)山伊舎那院青龍寺は、空海が唐に渡り長安の青龍寺で密教を学び、恵果和尚から真言の秘法を授かって真言第八祖となり、帰朝したのが大同元年(806)のことでした。

青龍寺の縁起では、大師はその恩に報いるため日本に寺院を建立しようと、東の空に向かって独鈷杵を投げ、有縁の勝地が選ばれるようにと祈願しました、独鈷杵は紫雲に包まれて空高く飛び去りました。

帰朝後、空海がこの地で巡教の旅をしているときに、独鈷杵は青龍寺奥之院の山の老松にあると感得して、ときの嵯峨天皇に奏上し、弘仁六年堂宇を建て石造の不動明王像を安置し、寺名を恩師に因み青龍寺、山号は遙か異国の地から放った「独鈷」を名のるようになりました。唐の青龍寺に似た伽藍配置で建てられています。

明治のころまで土佐七大寺といわれ、末寺四ヶ寺、脇坊六坊をもつ名刹でした。また、本尊の波切不動明王像は大師が入唐のさい、暴風雨を鎮めるために現れたと伝えられ、いまも航海の安全や豊漁、世間の荒波をも鎮めてくれると、深く信仰されています。

元横綱朝青龍が明徳義塾高等学校に在籍中のトレーニング場であり、青龍寺が四股名(しこな)の由来となりました。

中里薬師堂薬師三尊像と十二神将像（ルート外）

湖北駅北東の中里薬師堂の仏像群です。

元宝蔵院(廃寺)本尊、薬師三尊像鎌倉時代の後期頃、十二神将像は江戸時代後期の作です。

所有者である中里区の住民によって日常管理され、毎年2月11日にのみ御開帳されています。

令和年度の亥神像の修復作業において、差し込み式の頭部を抜いたところ、胎内から折りたたまれた古文書が見つかり以下の内容が記されていました。

そこから、江戸時代後期(DC18)に十二神将像が造立された可能性があると考えられます。

本尊である薬師如来立像は像高51cm一木造。両手と両足に別材を差し込み、左手に薬壷(やっこ)、頭部を内刳(うちぐり)し、玉眼(ぎょくがん)を嵌(は)め入れています。蓮弁型の光背は、身光部と周縁部を4材の板で作成し雲文(うんもん)で装飾しています。

脇侍(わきじ)となる日光菩薩像、月光(がっこう)菩薩立像は像高37cmで一木造り。頭部を内刳し、玉眼(雲母)を嵌め入れています。上半身には天衣(てんね)、条帛(じょうはく)を身に着け、下半身に裳(も)を着用し、手には雲上に乗る日輪、月輪を持ちます。頭飾は金属製です。十二神将像は子丑寅卯辰未午未申酉戌亥をあらわす十二の像で、頭の上に干支が象徴的には嵌め込まれています。いずれも高さ57cm内外の立像で寄木造、面部を割り剥いで玉眼を嵌め入れています。基本的には甲冑を身に着け、手には持物(法具や武器)を持っていますが、衣のみを身に着けるものもあります。岩座とよばれる台座の上に立ちます。

平成18年我孫子市指定有形文化財。

新四国相馬霊場88ヶ所を巡る会

2022/10/23　記